しまね情産協 No.70

２０２６年度秋号

Contents

1. 令和８年度総会開催
2. 令和８年度総会 記念講演会
3. 令和８年 IT 企業実態調査結果について
4. 特集　地域 DX の現在地～DX・AI 委員会の挑戦～
5. 第 41 回 親睦ゴルフコンペ開催
6. 編集後記　「知的財産権から考える AI 時代」



津和野の街並み



殿町通り



西周旧居

「技術」「科学」「芸術」「経済」「哲学」。明治時代の啓蒙思想家、西周（にしあまね）は、津和野で生を受け、外国の概念や学問をそのまま外国語で受け入れることができなかった時代に、これらを含む数多くの学術用語の創出・普及を通じ、近代日本の知の基盤を築きました。AI（人工知能）・DX（デジタル変革）の時代は、新たな知の地平を切り拓く転換点といわれます。しかし、その根底には、西周ら先人が外来の知を受け止め、日本社会に根付かせてきた努力があります。私たちは今、その 150 年以上にわたる知の系譜の先端に立っています。

1.　令和８年度総会開催



総会会場の様子

令和８年６月 17 日、松江市内において一般社団法人島根県情報産業協会令和８年度総会を開催しました。

総会では、令和 7 年度事業報告・決算、令和 8 年度事業計画・予算について審議が行われ、いずれも承認されました。
総会後には講演会および交流会を開催し、会員間の情報共有と親睦を深める機会となりました。
なお、交流会では、司会を務めた日本酒ソムリエ 石原美和 様から、石見・隠岐を中心とした県内産純米吟醸酒５種が紹介され、参加者は島根の地酒の豊かな風味を堪能しました



交流会で紹介された県内産純米吟醸酒（石見・隠岐）



恒例の「闘魂」による総会締めくくり

創刊７０号を迎えて

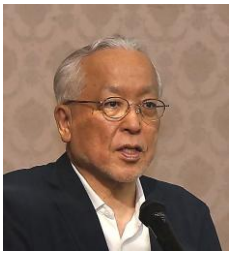
本誌は創刊以来、県内情報産業の歩みを伝えてきました。近年は AI や DX など新たな変革の時代を迎えていますが、地域に根差した情報産業の発展という使命は変わりません。

2.令和 8 年度総会 記念講演会

「若者の可能性を広げる大学教育と、
地域企業がその可能性を活かすためにできること」

－AI 時代の地域人材戦略：大学と IT 企業はどう共に育てるか－

講師　島根県立大学学長　山下一也先生



山下一也先生



講演会の様子

令和 8 年度総会終了後、島根県立大学学長の山下一也氏を講師に迎え、記念講演会を開催しました。

講演では、AI 時代に求められる人材育成の方向性や大学教育の現状が紹介され、地域企業と大学が連携し、若者の成長を支える仕組みづくりの重要性が強調されました。
特に、地域企業と大学が連携して人材を育成するための取組として、

- 企業課題をテーマとした PBL（課題解決型学習）の導入
- 学生を支援する企業技術者による現場メンターの派遣
- AI ソリューションの試作・検証を行う実践型インターンシップの推進

などが紹介されました。

山下学長からは、AI 時代の地域人材戦略として、大学と企業がそれぞれの役割を担いながら、地域における「人材の受け皿」を共に設計していくことの重要性が示されました。
※講演資料は、当協会ホームページにて期間限定で公開しています。

３．令和８年 IT 企業実態調査結果について

島根県情報産業協会では、県内 IT 産業の現状と課題を把握するため、令和 8 年度も県内ソフト系 IT 企業を対象とした実態調査を実施しました。調査対象 84 社のうち 82 社から回答をいただき、業界の最新動向を取りまとめています。


第 18 回

令和８年度

ソフト系IT業界の実態調査報告書

令和８年９月

一般社団法人
島根県情報産業協会

しまねソフト産業ビジネス研究会

県内 IT 産業の動向をまとめた実態調査報告書

売上高が 455 億円、経常利益が 43 億円となり、いずれも前年を上回りました。特に経常利益は前年比 36.5%増と大きく伸長し、県内 IT 産業の収益構造が改善しています。従事者数も初めて 2,000 人を超え、人材基盤の拡大が進んでいます。

一方で、約 7 割の企業が技術者不足を感じており、特にシステムエンジニアなど高度 IT 人材の確保が重要な課題となっています。

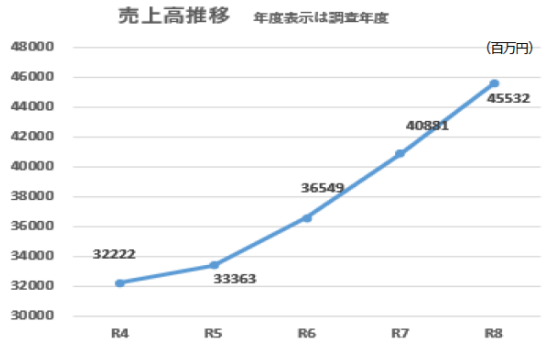
また、Ruby エンジニア数は 3 年連続で増加しており、島根県が強みとする Ruby 関連技術の裾野は着実に拡大しています。

調査自由意見では、人材育成、AI 活用、DX 推進支援、異業種連携などに関する期待が多く寄せられました。生成 AI 時代を迎え、県内 IT 企業には地域 DX を支える中核的な役割が一層期待されています。

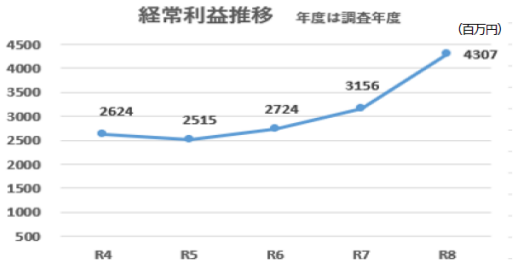
本調査結果が、今後の情報産業振興施策や地域 DX 推進の参考となれば幸いです。

令和 8 年度調査結果 5 つのポイント

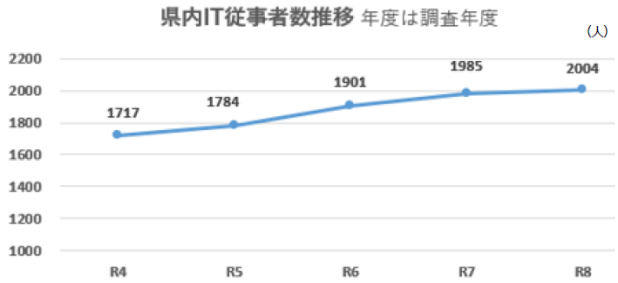
- **売上高：45,532 百万円（前年比＋11.4%）**
  過去最高を更新し、中期的な成長軌道を維持。



- **経常利益：4,307 百万円（前年比＋36.5%）**
  収益構造の質的改善が進み、企業の競争力が向上。



- **従事者数：2,004 名（前年比＋19 名）**
  大規模企業の成長と中規模企業の高い生産性が産業全体を牽引。



- **Ruby エンジニア増加**
  566 名 3 年連続増
- **人材不足が依然深刻**
  約 7 割が技術者不足を実感

※　調査結果の詳細につきましては、当協会ホームページに掲載しております「令和 8 年度 IT 企業実態調査報告書」をご覧ください。

４．特集　地域 DX の現在地
～DX・AI 委員会の挑戦～



地域課題に向き合う現場から、DX は始まる（ソフトビジネスパークから市街地を望む）

■ AI は「便利なツール」から「業務変革のパートナー」へ

島根県情報産業協会 DX・AI 委員会では、生成 AI（Artificial Intelligence）や DX（Digital Transformation）を単なる技術トレンドとして捉えるのではなく、地域企業・自治体が抱える課題の解決に直結する実践的な活用を重視しています。
委員会は次の 4 つを活動の柱として、地域における DX・AI 活用の推進に取り組んでいます。

- AI・DX 活用事例の共有
- 会員企業間の技術交流
- 地域企業への DX 支援
- AI 時代を見据えた人材育成

■ DX・AI 委員会 第 1 回事例報告会を開催

2026 年 8 月 12 日、松江オープンソースラボにおいて DX・AI 委員会の第 1 回事例報告会を開催しました。

本報告会は、会員企業や地域で進められている DX・AI 活用の取組を持ち寄り、互いに学び合うことを目的としたものです。併せて、委員会活動の中間報告として、現在の取組状況や今後の方向性についても共有しました。
今回の報告会では、生成 AI を単なる文書作成や検索のための「便利なツール」としてでは

なく、業務や組織そのもののあり方を見直す契機として捉える視点から、多様な事例が紹介されました。

■ 地域企業・自治体の課題解決を見据えた実践報告

報告会では、次のようなテーマについて、具体的な事例紹介と意見交換が行われました。

- 顧客との対話や伴走支援に AI をどのように組み込むか
- 既存の業務システムに生成 AI をどのように取り入れるか
- AI を活用して試行錯誤の回数を増やし、改善を加速できないか
- コミュニティや人材育成の場で AI をどのように活用するか
- 複数の AI エージェントを役割分担させ、業務プロセスそのものを再設計できないか

これらの議論を通じて、参加者からは「AI 活用そのものを目的化するものではなく、地域企業・自治体の課題解決に資する形で活用することが重要である」との意見が多く寄せられました。

■ AI 時代におけるシステム開発の新たな可能性

従来は、パッケージソフトやSaaSに業務を合わせることが一般的でした。しかし、生成AIの発達により、現場の業務に合わせた仕組みを、より迅速かつ低コストで構築できる可能性が広がりつつあります。
AI を活用することで、業務プロセスの再設計や改善の高速化が期待され、地域企業の DX 推進において新たな選択肢が生まれています。
DX・AI 委員会では、今後も会員企業相互の情報共有や事例研究を進めながら、地域における DX・AI 活用の推進に取り組んでいきます。

■ 井上会長コメント

AI・DX 時代における島根の情報産業への期待



島根県情報産業協会会長　井上浩

島根県の IT 産業は、売上・雇用ともに着実な成長を続けています。一方で、人材不足や技術革新への対応など、新たな課題も顕在化しています。
近年は生成 AI の急速な普及により、IT 企業自身の変革はもちろん、地域企業や自治体の DX 推進を支える役割が一層重要になっています。
当協会としても、人材育成、技術交流、ビジネスマッチングを通じて会員企業の成長を支援するとともに、地域社会の発展に貢献してまいります。
引き続き皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

5．第 41 回 親睦ゴルフコンペを開催

5 月 30 日（土)、玉造温泉カントリークラブにおいて、第 41 回親睦ゴルフコンペを開催しました。当日は初夏を思わせる好天に恵まれ、参加者はプレーと交流を楽しみました。会員企業間の親睦を深める有意義な機会となりました。



喜びの受賞の方々

主な成績

- 優　勝　女鹿田 晃和 氏（プロビズモ）
- 準優勝　福田 浩司 氏（SacoS）
- 第 3 位　松原 厚知 氏（協和通信工業）

また、ベストグロス賞は石﨑 修二 氏（オネスト)、
北村 功 氏（島根情報処理センター）が獲得されました。
今後も会員企業間の交流促進を目的として、親睦事業の充実に取り組んでまいります。



参加されたみなさん

編集後記　「知的財産権から考える AI 時代」

生成 AI や DX の進展により、情報産業を取り巻く環境は大きく変化しています。そうした中で、私自身が最近関心を持っているのが知的財産権です。

著作権法というと、従来は文学や音楽、美術など文化芸術分野との関わりで語られることが多かったように思います。私が特に関心を持っているのも著作権ですが、近年は AI による学習利用や生成物の取扱いなど、情報産業と深く関わるテーマとして議論されるようになっています。国や文化庁の審議会でも、こうしたデジタル時代への対応が重要な検討課題となっています。

また、知的財産制度は国内事情だけで成り立つものではなく、国際的なデジタル市場の拡大や各国制度との調和も求められるようになっています。こうした意味では、知的財産権を巡る議論は、文化政策であると同時に産業政策や国際競争力とも深く結び付くものになっているように感じます。

地域において DX 推進が重要な課題となるなか、私たち IT 事業者は企業や自治体に伴走する立場にあります。その際、技術的な支援だけでなく、データや成果物に関する権利の所在や責任の考え方についても、基礎的な知識を持っておくことが求められる時代になっているのではないでしょうか。

AI 時代を迎え、技術と制度、文化と産業の距離は急速に近づいています。変化の時代だからこそ、制度的背景や社会構造にも目を向けながら、地域とともに歩む情報産業でありたいと考えています。

（事務局長　中島 哲）



AI 時代には、技術開発だけでなく知的財産への理解も重要になっている。写真は島根ソフトビジネスパーク。地域の技術開発や知財活用を支える拠点の一つである。